

氏 名	田熊 友加里
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 の 番 号	甲第 211 号
学位授与年月日	2018（平成 30）年 3 月 20 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	『ペルシア絨毯』にみるオリент像の変容—ヴィルヘルム 2 世期ドイツにおける絨毯の商人・研究家・収集家の三者関係を中心に
論 文 審 査 委 員	主査 臼杵 陽 （史学専攻 教授） 副査 山下 将司 （史学専攻 准教授） 副査 近藤 光博 （史学専攻 准教授） 副査 坂本 勉 （慶應義塾大学 名誉教授） 副査 森田 安一 （本学 名誉教授）

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

### 論文概要：

本研究は、「ペルシア絨毯」というモノが表象するオリент像の変容に着目して、東西文化交渉史を新たな視点から再検討しようとするものである。本研究で取り扱う「オリент」とは、広義の中東と同義であり、言語による定義に基づいてアラビア語・ペルシア語・トルコ語・テュルク諸語および少数民族語が話された地域を指す。また、本論文で取り挙げる「ペルシア絨毯」とは、イランで織られた絨毯そのものを指すわけではない。そもそも「ペルシア」という用語は、ヨーロッパ人からみたイランの呼称であり、オリентを示す漠然としたイメージである。同様に、「トルコ絨毯」のトルコもヨーロッパ人からみたオスマン帝国を含む小アジア地域他称である。よって、本論文では「ペルシア絨毯」と「トルコ絨毯」をカギ括弧付きで使用する。絨毯の特定の産地を示す場合は、イラン産絨毯や小アジア産絨毯という名で区分して論じる。オスマン帝国領内で織られた絨毯を「オスマン絨毯」とは呼ばないからである。

オリентで織られた絨毯の最大の特徴は、製作地であるオリентとヨーロッパにおいて、その用途と価値が大きく変化する点である。元来、遊牧生活の中で織られてきたパイル織り絨毯は、オリентにおいて保温性・断熱性に優れた生活消耗品であった。パイル織り絨毯の大きな特徴は、二本の縦糸に染色されたパイル糸を絡めて毛羽を立てる手法である。この毛羽が

表面に図案となってあらわれ、絨毯に厚みを与える。一方のヨーロッパでは、単に縦糸と横糸を組み合わせた表面が滑らかな平織り（タペストリー）が主流であった。

オリエントの絨毯は、11 世紀以降に地中海貿易を介してヨーロッパに伝播すると、その稀少性から専ら鑑賞品として愛好され、原価の数百倍から数千倍に上る高い市場価格で取引された。近代に入ると、ウィーン万国博覧会(1873 年)やウィーン東洋絨毯博覧会(1891 年)を媒介にヨーロッパへの流通量を飛躍的に伸張し、その収集家層を従来の王侯貴族から産業革命以後に台頭したブルジョワジーへと拡大させた。ヨーロッパの人々は、「ペルシア絨毯」を絵画のように完成度の高い美術作品として高く評価し、一目で高値のつく換金性の高い商品として捉えるようになったのである。

絨毯が他のオリエントの工芸品に比べて多く流通した理由としては、丸めた状態での保存ができて携帯性に優れ、例えば陶器に比べて破損しにくい点、そして同じく緻密な手工技術を有するミニアチュール（細密画）に比べて生産量自体が多い点があげられる。また、オリエントの絨毯はヨーロッパで織られた絨毯が技術革新でもっても及ばない、現代イランの「ペルシア絨毯」に代表される独自のブランドを築き上げた。このように、絨毯は、東西交渉の過程で用途とその価値を状況に応じて変化させながらも、絨毯そのものがオリエントやエキゾティズムを表象する特殊な素材として存在してきたのである。

19 世紀後半以降、ヨーロッパの好事家の間では、「ペルシア絨毯」を含むイスラーム地域の美術品が収集され始め、各国の主要な美術館にイスラーム美術コレクションが形成された。イスラーム美術とは、イスラームを主要な宗教とする地域で生み出された美術作品、ムスリム（イスラーム教徒）が作り出した美術品、あるいはムスリムのために作られた美術作品を包括的に指し示す名称である。特徴的な点は、キリスト教美術や仏教美術のようにそれぞれの宗教と直接関連する美術品のみが含まれるのではなく、宗教とは無関係の世俗的な美術品も含まれる点である。扱う時代は、イスラームが誕生した 7 世紀から現代まで広範囲に及ぶ。

1904 年には、ドイツのベルリン美術館(Staatliche Museen zu Berlin)の研究者で、後に総館長となったヴィルヘルム・ボーデ(Wilhelm von Bode 1845-1929 年) が、ヨーロッパで初めてイスラーム美術を専門とする美術館を設立した。ベルリン美術館は、ベルリン中心部に隣接する旧博物館(Altes Museum)、新博物館(Neues Museum)、カイザー・フリードリヒ博物館(Kaiser-Friedrich Museum、のちにボーデ博物館に改称される)、旧国立美術館(Alte Nationalgalerie)、ペルガモン博物館(Pergamonmuseum)の 5 つの博物館と美術館の総称であり、別称「博物館島」(Museumsinsel)と呼ばれている。各々の博物館と美術館に館長がおり、さらに総館長が「博物館島」全体を統括した。

当初、イスラーム美術館は、プロイセン王家の美術コレクションを収蔵したカイザー・フリードリヒ博物館の一區画に開設され、その後、1936 年に隣接するペルガモン博物館の二階へ移

設された。博物館の中に入れ子式に博物館が設けられた形となるが、本論文では便宜上、「ベルリン・イスラーム美術館」と記すことにする。

ボーデは、オリエントで織られた古い絨毯にアンティークとしての学術的価値を見出して、新しい学問分野の「絨毯研究」を創始した。彼は、研究論文「ベルリン王立博物館所蔵のペルシア古絨毯」(Wilhelm von Bode. “Ein altepersischer Teppich im Besitz der Königlichen Museen zu Berlin.” In *Jahrbuch der Königlich Preussischen Kunstsamm-lungen*. 13, 1892.)において、オリエントで織られた絨毯(Orientalische Teppich)の種類を、「ペルシア絨毯」(alt persische Teppich)、小アジア産絨毯(kleinasiatische Teppich)、アルメニア絨毯(armenische Teppich)に区別して論じていた。

しかしながら、筆者は次のような疑問を呈したい。すなわち、19世紀半ばから20世紀初頭において、オリエント産絨毯の売買・収集・研究に携わっていたヨーロッパの人々は「ペルシア絨毯」を厳密に識別することができていたのであろうか。その疑問に答えるために、筆者はベルリン・イスラーム美術館所蔵の絨毯目録を基に絨毯の製作地、所蔵された年、入手経路の統計を取った。結果、収集された「ペルシア絨毯」は16世紀から18世紀にイランで生産されたものが主流であるが、時代を下るにしたがって、小アジア産絨毯が大半を占めていることが判明した。

これは、イランの絨毯産業が18世紀末から19世紀中葉にかけて停滞したことと対応している。おそらく、入手困難な「ペルシア絨毯」に代わって地理的にドイツに近く、当時において絨毯の一大市場であったオスマン帝国(1299-1922年)領内のイスタンブルで買い付けた「トルコ絨毯」が「ペルシア絨毯」に準ずるものとして扱われたのだ。また、18世紀以前に製作された古い絨毯の中には、本来の所有者からの転売を重ねた結果、製作地や流通経路が正確に記録されていないものが多くみられた。

既存の研究においては、絨毯の名称と実際に絨毯が織られた産地は一致することを前提に論じられており、両者の間にみられる多少の誤差は問題なく看過されてきた。しかし、筆者は、曖昧な「ペルシア絨毯」の定義と、実際に収集された絨毯の産地の相違に着目して、この相違にこそ当時のヨーロッパの人々が抱いたオリエント像を分析する重要な鍵が隠されていると新たに仮説を立てた。

「ペルシア絨毯」が流行した19世紀後半から20世紀半ば頃のヨーロッパに目を向けると、産業革命以来の機械制工業の発達により、モノの大量生産・大量消費の時代へと突入していた。汽船・鉄道などの交通網の整備と電信の発達によって、ヒト・モノ・カネ・情報が地域を越えて広範囲に流通し、世界の一体化(グローバリゼーション)が急激に進んだ時代であった。また、欧米を中心に資本主義経済が発達し、各国は商品や余剰資本を輸出するための海外市場をアフリカ、アジアに求めて進出していった。

露土戦争(1877年)でロシアにとって極めて有利な内容のサン・ステファノ条約が締結されると、ドイツ宰相ビスマルクはベルリン会議を開いてロシアの南下政策を阻止した。一方でフランスはカトリック教徒の保護を理由にオスマン帝国の内政に干渉し、オリエン特における影響力を拡大していった。1888年にはドイツ皇帝ヴィルヘルム2世(在位1888-1918年)が積極的な「世界政策」を掲げ、オリエン特における植民地獲得競争へ本格的に参入していった。当然ながら、政治的経済的な利益を動機に政府関係者や知識人を中心に、オリエン特に対する関心が高まり、オリエン特の歴史・政治・経済・語学・考古学・美術などの多岐にわたる分野で研究が活発に行われた。このようなヴィルヘルム2世時代のドイツ帝国の枠組みの中で、「ペルシア絨毯」はオリエン特の特産物としての価値を再発見されたといえる。

以上の時代背景を踏まえて、筆者は、オリエン特で織られた絨毯の流通(絨毯商人)・研究(美術館の研究家)・収集(収集家)の各分野に携わったドイツ人の多様な動向を総合的に俯瞰することによって、「ペルシア絨毯」に対する認識の相違の要因を分析しようと考えた。筆者は、オリエン特(東洋)とオクシデント(西洋)という地域的・文化的な枠組みを越えた世界史的な視座から、ドイツとオリエン特を結ぶ多文化交渉史を分析することを目指している。この研究方法は、先行研究において問題視されがちであった欧米の研究者の間に潜在するジャポニスムを含む東洋への先入観や偏見というオリエンタリズム批判を踏まえた上で、東洋を見る主体としての日本人、および東洋として見られる日本人という両義的な視点から地域研究を論じることが可能となる点で大きな意義がある。

そこで、本論文では、「絨毯商人がとらえたオリエン特像」「絨毯研究家がとらえたオリエン特像」「絨毯収集家がとらえたオリエン特像」という3つの異なる視点から、「ペルシア絨毯」に象徴されたオリエン特像の変容と相互関係について論じた。

第1章は、第1節「『ペルシア絨毯』の登場(1873年)以前のオリエン特の絨毯」と第2節「19世紀イランの貿易構造の変容と『ペルシア絨毯』の普及」の二節から構成される。「ペルシア絨毯」がヨーロッパの一般大衆に広く認知される契機となったウィーン万国博覧会を境に、高額なアンティークの「ペルシア絨毯」を収集する貴族や美術館と、「ペルシア絨毯」を模した手頃な価格のオリエン特産絨毯を収集するブルジョワジーの、二通りの顧客層を形成した点を明らかにした。また、絨毯需要の急増を受けてガーજール朝イラン(1779-1925年)へ進出した英独系外国商会と、彼らと拮抗した地元のタブリーズの商人の動向を取り挙げて、19世紀から20世紀イランにおける絨毯交易の諸相を多角的に論じた。

第2章では、「絨毯商人がとらえたオリエン特像」の視点に立ち、スイスのチューリヒに拠点を置いたマイヤー・ミュッラー商会(Teppichhause Meyer-Müller & Co.)に焦点を当てた。同商会は、1870年代からオリエン特産絨毯の輸入業で発展を遂げたが、1994年の会社解散で絨毯貿易に関する記録が廃棄されたため、会社の存在自体が未開のまま絨毯研究史の中から抜け落

ちていた。しかし、筆者は、日本の国立民族学博物館（大阪府吹田市）に稀少なマイヤー・ミュッラー商会の絨毯の一部が所蔵されている点を発見し、実地調査を行った。

さらに筆者は、独自に入手したマイヤー・ミュッラー商会の文献資料と元社員へのインタビュー調査の結果を基に、同商会の創立から解散に至る 120 年余りの歴史、その経営体制、スイスとトルコおよびイランを結ぶ絨毯交易のネットワーク、同時代の外国商会との相互関係を国内外の研究者で初めて解明できた。

マイヤー・ミュッラー商会は、1900 年代初頭においてイスタンブルとスミルナの二つの海港都市を絨毯交易の重要な拠点に据えて、それぞれ「ペルシア絨毯」と「トルコ絨毯」の流通経路の棲み分けをしていた。「トルコ絨毯」は、1860 年代から欧米向けの絨毯生産が本格化したため、絨毯生産地に近い海港都市スミルナが「トルコ絨毯」の集荷・集散地として確立されていた。これに対して、「ペルシア絨毯」は、イランからイスタンブルを経由する中継貿易の形をとってヨーロッパ方面へ流通したのである。

しかしながら、当時の絨毯売買に関与した商人たちが「ペルシア絨毯」と「トルコ絨毯」を厳密に区別できていた可能性は低い。マイヤー・ミュッラー商会は絨毯の産地区分表を定めていたが、同社の文献資料『オリエントの絨毯』(Meyer-Müller. *Der Orientalische Teppich*. Bern. 1904.)の中で、「いわゆるスミルナ産絨毯(Smyrna-Teppich)を大量に買い付け、我々はその大部分をオリエントの絨毯(Orient-Teppich)として記載する」と記述されており、産地区分に矛盾がみられる。そこで筆者は次のように分析した。

マイヤー・ミュッラー商会、すなわち絨毯商人にとって、「ペルシア絨毯」はオリエント・イメージを端的に体現したモノであり、ウィーン万国博覧会を契機とする絨毯流行に感化された顧客の購買意欲を惹きつける宣伝広告の役割を担ったと考えられる。彼らは、「ペルシア絨毯」に表象されたオリエント像が絨毯に高い商品価値を付与することを最も重要視したのである。万国博覧会以来の絨毯需要を支えていたのは、少数のイラン産の「ペルシア絨毯」と、多数の小アジア産の絨毯であった。

次に第 3 章では、「絨毯研究家がとらえたオリエント像」の視点から、ヴィルヘルム・ボーデによる学問分野「絨毯研究」を通じて、古絨毯が「アンティーク絨毯」としての価値を再評価されていた歴史的過程を論じた。また、ベルリン・イスラーム美術館の設立に大きな影響を与えたブルジョワ絨毯収集家、ならびにヴィルヘルム 2 世との関係を明らかにした。

ボーデはオリエント現地へ赴いたことがなく、15～16 世紀に描かれた西洋絵画というフィルターを通して「ペルシア絨毯」すなわちオリエント像をとらえていた。ボーデの「絨毯研究」において、「ペルシア絨毯」は、西洋美術史の時代区分の枠に当てはめられて、西洋を主体とする比較関係の中で論じられてきたのである。

また、ボーデは、自身の「ペルシア絨毯」コレクションを基底にベルリン・イスラーム美術館の設立に奔走した。当時、ベルリン美術館には古代エジプト博物館と古代メソポタミア博物館が設置されており、この両者に劣らず観客を惹きつける展示品の追加なしに新たな博物館を開設することは困難な状況にあった。1902年にヨルダンでイスラーム期のウマイヤ朝(8世紀)に建てられたムシャッタ宮殿の城壁が発掘されると、ボーデはヴィルヘルム2世に城壁の歴史的重要性を訴えかけ、オスマン帝国から「譲渡」という名目で城壁の一部を獲得することに成功した。この城壁はベルリンまで運搬され、美術館内に実寸大(全長33メートル、高さ5メートル)で再現された。ボーデがヴィルヘルム2世の外交力を頼ることによって、城壁と共に陳列された「ペルシア絨毯」もまた政治色を強く帯びるようになった。結果として、絨毯はムシャッタ宮殿の城壁とともに、ヴィルヘルム2世が注力した文化政策の成果を体現するモニュメントとして数えられたのである。

続く第4章では、「絨毯収集家がとらえたオリент像」の視点に立ち、東方系ユダヤ人(Ostjuden)の絨毯収集家イエームズ・ジーモンとその一族を事例に取り上げた。本論文では東方系ユダヤ人(Ostjuden)をポーランド・ユダヤ人の同義語として使用した。ポーランド移民出身のジーモンが、ベルリンの経済界及び政治界の重鎮を占める大実業家へと立身出世した背景を解明した上で、ジーモンが自らの関心をオリент産の絨毯収集から、古代エジプトや古代メソポタミアをはじめとするオリент考古学へと転換していった動機を分析した。

かつてドイツを中心に暮らしていた「アシュケナジ」と呼ばれるユダヤ人は、14世紀の黒死病(ペスト)流行の際のユダヤ人大虐殺を機に、安住の地を求めてポーランドなどの東欧へ移住して繁栄した。もとをただせばドイツからの移住者でありながら、ドイツの人々からみれば、東方系ユダヤ人は中世以降にドイツのユダヤ人とは異なる歴史を歩んできた点で、オリентと同じくらいに異質な存在として捉えられていたのである。

ジーモンは、社会的にマイノリティーな存在でありながら、ドイツ・オリент協会(DOG)の発掘調査を資金面で支援することで、親皇帝派の「カイザー・ユーデン」の一員としてドイツ社会における政治的後ろ盾を得ていた。ジーモンが支援したエジプトにおけるネフティティの胸像の発掘(1912年)や、イラクにおけるバビロンのイシュタル門の発掘(1899~1930年)は、ヴィルヘルム2世の文化政策の象徴として現在に遺されている。このようなジーモンの動向は、近代オリент学研究を方向づける重要な要素のひとつであったと筆者は考察した。

また、ジーモンをはじめとするユダヤ人収集家にとって、オリентは旧約聖書で語り継がれた祖国であった。旧約聖書の構成には、古代エジプトと古代メソポタミアの影響が色濃くみられる。例えば、モーセが登場する「出エジプト記」では、エジプトに移住したユダヤ人の子孫がエジプト王(ファラオ)のもとで迫害に遭う姿が描かれている。したがって、ジーモンのオリентに対する強い憧憬が、古代エジプトと古代メソポタミアに対する知的探究心と結び

つくことは当然の結果であった。彼らにとって、「ペルシア絨毯」を含むオリент伝来の美術品を収集する行為は、流浪の民である彼らユダヤ人のルーツと存在意義を表明する重要な手段であった。「ペルシア絨毯」は他のオリентの美術品と並んで、彼らの目を古代オリентへ向けさせる契機を与えた存在だったのである。

以上に述べた内容を踏まえて、結論では、絨毯商人・絨毯研究家・絨毯収集家の三者のとらえたオリент像の共通点と相違点を浮かび上がらせ、「ペルシア絨毯」が 19～20 世紀ドイツの人々にとってどのような存在であったのかという点について考察した。筆者は、三者に共通する点として「ペルシア絨毯」が、その担い手（所有者）である絨毯商人、絨毯研究家、絨毯収集家の属する社会的立場や政治的立場、あるいは外的な影響によって、表象するオリент像を大きく変容させてきた点を指摘した。それは同時に、「ペルシア絨毯」に秘められたオリент像の多様性を証明している。故に、各人が思い描くオリент像に相違が生じるのである。このように、多岐にわたる分野に影響を及ぼしたオリентのモノは、「ペルシア絨毯」の他に類を見ない。筆者は、「ペルシア絨毯」を商業的価値と学術的価値を併せもつ特殊な存在であると結論づけた。

## 論文審査結果の要旨

### 論文内容の要旨

本研究は、「ペルシア絨毯」というモノが表象するオリент像の変容に着目して、東西文化交渉史を新たな視点から再検討しようとするものである。本研究で取り扱う「オリент」とは、広義の中東と同義であり、言語による定義に基づいてアラビア語・ペルシア語・トルコ語・テュルク諸語および少数民族語が話された地域を指す。また、本論文で取り挙げる「ペルシア絨毯」とは、イランで織られた絨毯そのものを指すわけではない。そもそも「ペルシア」という用語は、ヨーロッパ人からみたイランの呼称であり、オリентを示す漠然としたイメージである。同様に、「トルコ絨毯」のトルコもヨーロッパ人からみたオスマン帝国を含む小アジア地域他称である。よって、本論文では「ペルシア絨毯」と「トルコ絨毯」をカギ括弧付きで使用する。絨毯の特定の産地を示す場合は、イラン産絨毯や小アジア産絨毯という名で区分して論じる。オスマン帝国領内で織られた絨毯を「オスマン絨毯」とは呼ばないからである。

オリентの絨毯は、11 世紀以降に地中海貿易を介してヨーロッパに伝播すると、その稀有性から専ら鑑賞品として愛好され、原価の数百倍から数千倍に上る高い市場価格で取引された。近代に入ると、ウィーン万国博覧会(1873 年)やウィーン東洋絨毯博覧会(1891 年)を媒介にヨーロッパへの流通量が飛躍的に伸張し、その収集家層を従来の王侯貴族から産業革命以後に台頭

したブルジョワジーへと拡大させた。ヨーロッパの人々は、「ペルシア絨毯」を絵画のように完成度の高い美術作品として高く評価し、一目で高値のつく換金性の高い商品として捉えるようになったのである。

絨毯が他のオリエントの工芸品に比べて多く流通した理由としては、丸めた状態での保存ができて携帯性に優れ、例えば陶器に比べて破損しにくい点、そして同じく緻密な手工技術を有するミニアチュール（細密画）に比べて生産量自体が多い点があげられる。また、オリエントの絨毯はヨーロッパで織られた絨毯が技術革新でもって及ばない、現代イランの「ペルシア絨毯」に代表される独自のブランドを築き上げた。このように、絨毯は、東西交渉の過程で用途とその価値を状況に応じて変化させながらも、絨毯そのものがオリエントやエキソティズムを表象する特殊な素材として存在してきたのである。

1904年には、ドイツのベルリン美術館(*Staatliche Museen zu Berlin*)の研究者で、後に総館長となったヴィルヘルム・ボーデ(*Wilhelm von Bode 1845-1929* 年) が、ヨーロッパで初めてイスラーム美術を専門とする美術館を設立した。ベルリン美術館は、ベルリン中心部に隣接する旧博物館(*Altes Museum*)、新博物館(*Neues Museum*)、カイザー・フリードリヒ博物館(*Kaiser-Friedrich Museum*、のちにボーデ博物館に改称される)、旧国立美術館(*Alte Nationalgalerie*)、ペルガモン博物館(*Pergamonmuseum*)の 5 つの博物館と美術館の総称であり、別称「博物館島」(*Museumsinsel*) と呼ばれている。各々の博物館と美術館に館長がおり、さらに総館長が「博物館島」全体を統括した。

ボーデは、オリエントで織られた古い絨毯にアンティークとしての学術的価値を見出して、新しい学問分野の「絨毯研究」を創始した。彼は、研究論文「ベルリン王立博物館所蔵のペルシア古絨毯」(*Wilhelm von Bode. "Ein altpersischer Teppich im Besitz der Königlichen Museen zu Berlin."* In *Jahrbuch der Königlich Preussischen Kunstsammlungen*. 13, 1892.) において、オリエントで織られた絨毯の種類を、「ペルシア絨毯」、小アジア産絨毯、アルメニア絨毯に区別して論じていた。

しかしながら、筆者は次のような疑問を呈している。すなわち、19 世紀半ばから 20 世紀初頭において、オリエント産絨毯の売買・収集・研究に携わっていたヨーロッパの人々は「ペルシア絨毯」を厳密に識別することができていたのだろうか。その疑問に答えるために、筆者はベルリン・イスラーム美術館所蔵の絨毯目録を基に絨毯の製作地、所蔵された年、入手経路の統計を取った。結果、収集された「ペルシア絨毯」は 16 世紀から 18 世紀にイランで生産されたものが主流であるが、時代を下るにしたがって、小アジア産絨毯が大半を占めていることが判明したとしている。

これは、イランの絨毯産業が 18 世紀末から 19 世紀中葉にかけて停滞したことと対応している。おそらく、入手困難な「ペルシア絨毯」に代わって地理的にドイツに近く、当時において



絨毯の一大市場であったオスマン帝国(1299-1922 年)領内のイスタンブールで買い付けた「トルコ絨毯」が「ペルシア絨毯」に準ずるものとして扱われたからであろう。また、18 世紀以前に製作された古い絨毯の中には、本来の所有者からの転売を重ねた結果、製作地や流通経路が正確に記録されていないものが多くみられた。

既存の研究においては、絨毯の名称と実際に絨毯が織られた産地は一致することを前提に論じられており、両者の間にみられる多少の誤差は問題なく看過されてきた。しかし、筆者は、曖昧な「ペルシア絨毯」の定義と、実際に収集された絨毯の産地の相違に着目して、この相違にこそ当時のヨーロッパの人々が抱いたオリент像を分析する重要な鍵が隠されていると新たに仮説を立てている。

以上を踏まえて、筆者は、オリентで織られた絨毯の流通（絨毯商人）・研究（美術館の研究家）・収集（収集家）の各分野に携わったドイツ人の多様な動向を総合的に俯瞰することによって、「ペルシア絨毯」に対する認識の相違の要因を分析できると考えた。筆者は、オリエン（東洋）とオクシデント（西洋）という地域的・文化的な枠組みを越えた世界史的な視座から、ドイツとオリエンを結ぶ多文化交渉史を分析することを目指している。この研究方法は、先行研究において問題視されがちであった欧米の研究者の間に潜在するジャポニズムを含む東洋への先入観や偏見というオリエンタリズム批判を踏まえた上で、東洋を見る主体としての日本人、および東洋として見られる日本人という両義的な視点から地域研究を論じることが可能となる点で大きな意義がある。

そこで、本論文では、「絨毯商人がとらえたオリエン像」「絨毯研究家がとらえたオリエン像」「絨毯収集家がとらえたオリエン像」という 3 つの異なる視点から、「ペルシア絨毯」に象徴されたオリエン像の変容と相互関係について論じられている。

第 1 章は、第 1 節「『ペルシア絨毯』の登場(1873 年)以前のオリエンの絨毯」と第 2 節「19 世紀イランの貿易構造の変容と『ペルシア絨毯』の普及」の二節から構成される。「ペルシア絨毯」がヨーロッパの一般大衆に広く認知される契機となったウィーン万国博覧会を境に、高額なアンティークの「ペルシア絨毯」を収集する貴族や美術館と、「ペルシア絨毯」を模した手頃な価格のオリエン産絨毯を収集するブルジョワジーの、二通りの顧客層を形成した点が明らかにされた。また、絨毯需要の急増を受けてガージャール朝イラン(1779-1925 年)へ進出した英独系外国商会と、彼らと拮抗した地元のタブリーズの商人の動向が取り上げられ、19 世紀・20 世紀イランにおける絨毯交易の諸相が論じられた。

第 2 章では、「絨毯商人がとらえたオリエン像」の視点に立ち、スイスのチューリヒに拠点を置いたマイヤー・ミュッラー商会(Teppichhause Meyer- Müller & Co.)に焦点が当てられた。同商会は、1870 年代からオリエン産絨毯の輸入業で発展を遂げたが、1994 年の会社解散で絨毯貿易に関する記録が廃棄されたため、会社の存在自体が未開のまま絨毯研究史の中から抜け

落ちていた。しかし、筆者は、国立民族学博物館（大阪府吹田市）にマイヤー・ミュッラー商会の絨毯の一部が所蔵されていることから実地調査を行った。

さらに筆者は、独自に入手したマイヤー・ミュッラー商会の文献資料と元社員へのインタビュー調査の結果を基に、同商会の創立から解散に至る 120 年余りの歴史、その経営体制、スイスとトルコおよびイランを結ぶ絨毯交易のネットワーク、同時代の外国商会との相互関係を国内外の研究者で初めて解明したと評価できる。

マイヤー・ミュッラー商会は、1900 年代初頭においてイスタンブルとスミルナの二つの海港都市を絨毯交易の重要な拠点に据えて、それぞれ「ペルシア絨毯」と「トルコ絨毯」の流通経路の棲み分けをしていた。「トルコ絨毯」は、1860 年代から欧米向けの絨毯生産が本格化したため、絨毯生産地に近い海港都市スミルナが「トルコ絨毯」の集荷・集散地として確立されていた。これに対して、「ペルシア絨毯」は、イランからイスタンブルを経由する中継貿易の形をとってヨーロッパ方面へ流通した。

しかし、当時の絨毯売買に関与した商人たちが「ペルシア絨毯」と「トルコ絨毯」を厳密に区別できていた可能性は低い。マイヤー・ミュッラー商会は絨毯の産地区分表を定めていたが、同社の文献資料『オリエントの絨毯』(Meyer-Müller. *Der Orientalische Teppich*. Bern. 1904.) の中で、「いわゆるスミルナ産絨毯(Smyrna-Teppich)を大量に買い付け、我々はその大部分をオリエントの絨毯(Orient-Teppich)として記載する」と記述されており、産地区分に矛盾がみられる。そこで筆者は次のように分析している。

マイヤー・ミュッラー商会、すなわち絨毯商人にとって、「ペルシア絨毯」はオリエント・イメージを端的に体現したモノであり、ウィーン万国博覧会を契機とする絨毯流行に感化された顧客の購買意欲を惹きつける宣伝広告の役割を担ったと考えられる。彼らは、「ペルシア絨毯」に表象されたオリエント像が絨毯に高い商品価値を付与することを最も重要視したのである。万国博覧会以来の絨毯需要を支えていたのは、少数のイラン産の「ペルシア絨毯」と、多数の小アジア産の絨毯であった。

次に第 3 章では、「絨毯研究家がとらえたオリエント像」の視点から、ヴィルヘルム・ボーデによる学問分野「絨毯研究」を通じて、古絨毯が「アンティーク絨毯」としての価値を再評価されていった歴史的過程を論じた。また、ベルリン・イスラーム美術館の設立に大きな影響を与えたブルジョワ絨毯収集家、ならびにヴィルヘルム 2 世との関係を明らかにしている。

ボーデはオリエント現地へ赴いたことがなく、15～16 世紀に描かれた西洋絵画というフィルターを通して「ペルシア絨毯」すなわちオリエント像をとらえていた。ボーデの「絨毯研究」において、「ペルシア絨毯」は、西洋美術史の時代区分の枠に当てはめられて、西洋を主体とする比較関係の中で論じられてきたのである。ボーデは、自身の「ペルシア絨毯」コレクションを基底にベルリン・イスラーム美術館の設立に奔走した。結果として、絨毯は、ヴィルヘルム 2

世が注力した文化政策の成果を体現するモニュメントとして数えられたのである。

第4章では、「絨毯収集家がとらえたオリент像」の視点に立ち、東方系ユダヤ人(Ostjuden)の絨毯収集家イェームズ・ジーモンとその一族が取り上げられる。ポーランド移民出身のジーモンが、ベルリンの経済界及び政治界の重鎮を占める大実業家へと立身出世した背景を解明した上で、ジーモンが自らの関心をオリент産の絨毯収集から、古代エジプトや古代メソポタミアをはじめとするオリент考古学へと転換していった動機を分析している。

ジーモンは、ユダヤ人として社会的にマイノリティーの存在でありながら、ドイツ・オリент協会(DOG)の発掘調査を資金面で支援することで、親皇帝派の「カイザー・ユーデン」の一員としてドイツ社会における政治的後ろ盾を得ていた。ジーモンが支援したエジプトにおけるネフティティの胸像の発掘(1912年)や、イラクにおけるバビロンのイシュタル門の発掘(1899～1930年)は、ヴィルヘルム2世の文化政策の象徴として現在に遺されている。このようなジーモンの動向は、近代オリент学研究を方向づける重要な要素のひとつであったと筆者は考察している。

以上に述べた内容を踏まえて、結論では、絨毯商人・絨毯研究家・絨毯収集家の三者のとらえたオリент像の共通点と相違点を浮かび上がらせ、「ペルシア絨毯」が19～20世紀ドイツの人々にとってどのような存在であったのかという点について考察している。筆者は、三者に共通する点として「ペルシア絨毯」が、その担い手(所有者)である絨毯商人、絨毯研究家、絨毯収集家の属する社会的立場や政治的立場、あるいは外的な影響によって、表象するオリент像を大きく変容させてきた点を指摘している。それは同時に、「ペルシア絨毯」に秘められたオリент像の多様性を証明している。故に、各人が思い描くオリент像に相違が生じるのである。このように、多岐にわたる分野に影響を及ぼしたオリентのモノは、「ペルシア絨毯」の他に類を見ない。筆者は、「ペルシア絨毯」を商業的価値と学術的価値を併せもつ特殊な存在であると結論づけている。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文は、「ペルシア絨毯」というモノが表象するオリент像の変容に着目して、東西文化交渉史を新たな視点から再検討したものである。すなわち、オリентで織られた絨毯の流通(絨毯商人)・研究(美術館の研究家)・収集(収集家)の各分野に携わったドイツ人の多様な動向を分析することによって、三者の「ペルシア絨毯」に対する認識の相違のありようを分析している。その際、筆者は、欧米の研究者の間に潜在するジャポニズムを含む東洋への先入観や偏見という先行研究において問題視されたオリエンタリズム的傾向への批判を踏まえた上で、東洋を見る主体としての日本人、および東洋として見られる日本人という両義的な視点から本テーマを論じることができると考えている。

したがって、本論文では、「絨毯商人がとらえたオリент像」「絨毯研究家がとらえたオリент像」「絨毯収集家がとらえたオリент像」という 3 つの異なる視点から、「ペルシア絨毯」に象徴されたオリент像の変容と相互関係が論じられている。筆者は、絨毯商人・絨毯研究家・絨毯収集家の三者のとらえたオリент像の共通点と相違点を浮かび上がらせ、「ペルシア絨毯」が 19～20 世紀ドイツの人々にとってどのような存在であったのかを考察している。結論として、絨毯商人、絨毯研究家、絨毯収集家の三者の属する社会的立場や政治的立場、あるいは外的な影響によって、「ペルシア絨毯」に表象されるオリент像を大きく変容させており、各人が思い描くオリент像には多様性があると指摘している。このように、筆者は、多岐にわたる分野に影響を及ぼしたオリентのモノは、「ペルシア絨毯」の他に類を見ないとして、商業的価値と学術的価値を併せもつ特殊な存在であると結論づけている。

以上のような内容をもつ博士論文に対して審査委員会では次のような議論が行われた。

第一に、本論文では、「オリент」で織られた絨毯の流通（絨毯商人）・研究（美術館の研究家）・収集（絨毯収集家）という三者によるオリент像の多様性が論じられているが、とりわけ第 3 章で議論されている「ペルシア絨毯」のコレクションを基にベルリン・イスラーム美術館の設立したヴィルヘルム・ボーデに関する叙述がもっとも精彩があり際立っているという点において全般的に高い評価であった。

第二に、第 2 章で論じられている、国立民族学博物館所蔵の絨毯コレクション調査を端に発する、スイスのチューリヒに拠点を置いたマイヤー・ミュッラー商会の文献資料調査と元社員へのインタビューも高く評価できる。というのも、インタビューによって、同商会の創立から解散に至る 120 年余りの歴史、その経営体制、スイスとトルコおよびイランを結ぶ絨毯交易のネットワーク、同時代の外国商会との相互関係を具体的に解明しており、その詳細な記述に基づく知見は独創性があると評価できるからである。

第三に、本論文の絨毯に代表されるように、ヨーロッパ史における茶、コーヒーなどの「モノ」の歴史、とくに絨毯に関する歴史記述はふくらみを持ち、美術史から世界史を書くことの可能性を示唆するものであると評価される。

他方、本論文の審査と口頭試問の中で、審査委員から質問と指摘がなされた。

第一に、第 4 章の東方系ユダヤ人の絨毯収集家イエームズ・ジーモンとその一族に関する記述はあまりに概説的である。というのも、本章の記述では「絨毯収集家がとらえたオリент像」の観点から描写されているが、一次資料が十分に利用されていないことに起因するものである。ジーモンに関する記述に関しては、ベルリンの経済界及び政治界の重鎮を占める大実業家へと立身出世した背景を解明した上で、ジーモンが自らの関心をオリент産の絨毯収集から、古代エジプトや古代メソポタミアをはじめとするオリент考古学へと転換していった動機が分析されている。しかし、絨毯の商人、研究家、収集家という三者の環の中では、本論の

タイトルにある収集家の「オリент像の変容」が明確ではない。

第二に、本論文では「ペルシア絨毯」の流通を扱っているにもかかわらず、経済史的研究の観点からするとヨーロッパと中東との間の商業・流通の分析において不十分なところがあることも認めざるをえない。その原因として指摘できるのは、イスタンブルとともに積み出し港の一つとなっていたトルコのスマイルナ（イズミル）からヨーロッパ市場への入口になっていたイタリア半島の港トリエステへの交易路・ルートを説明するだけにとどまり、絨毯取引の中継市場となっていたイスタンブルおよびスマイルナにおける交易・取引にかんして具体的な言及がなされていないからである。これらの点についてマイヤー・ミュラー商会文書に記述がない場合は、それを補う史料としてイスタンブル、イズミルに駐在していた英領事の報告などを参照し、内容を膨らますべきであったと思われる。また、トルコ、イランから黒海北岸の大貿易港であるオデッサを経由してドイツ市場につながる別の交易路・ルートからも絨毯は流通していた可能性があり、とくにライプツィヒ市場の果たしていた役割は非常に大きく、これから先検討しなければならないテーマである。

第三に、「ペルシア絨毯」を商人、研究家、収集家という三者の相互関係を分析しているが、「オリент像の変容」という観点からは結論が十分に明確ではないという評価も可能であるので、今後の課題とすべきであろう。

上記の審査結果を総合的に勘案した結果、審査委員会は全員一致で、本論が博士論文としての学術的水準を十分に越えるものであり、博士（文学）の学位を授与するに値するものであると判断する。